

# アメリカ陥落8

暗黒の夏

大石英司

*Eiji Oishi*

## 立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～25頁までを収録したものです。

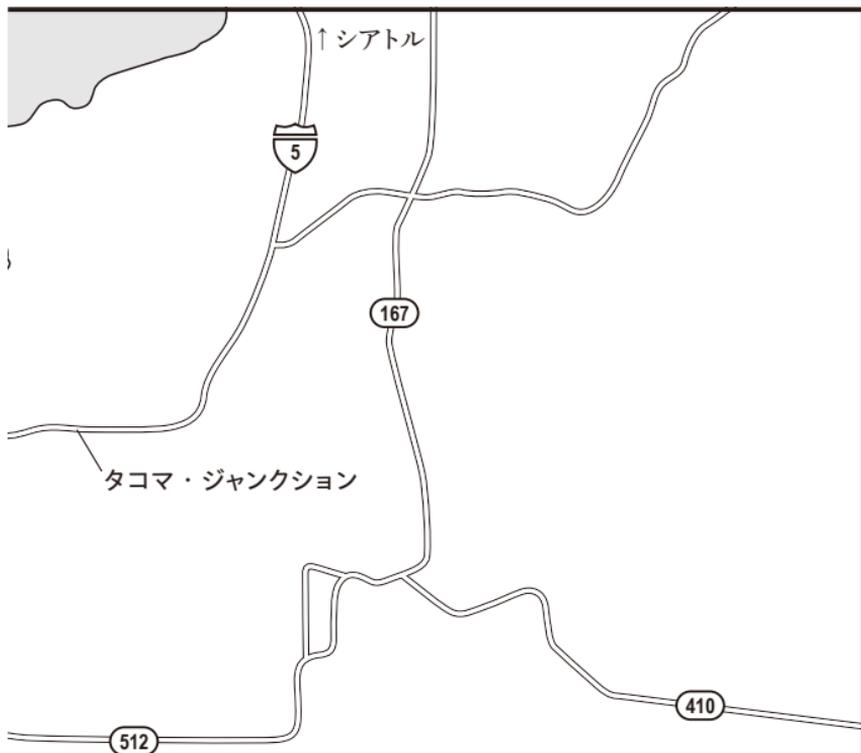
### ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶ (次ページ) をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

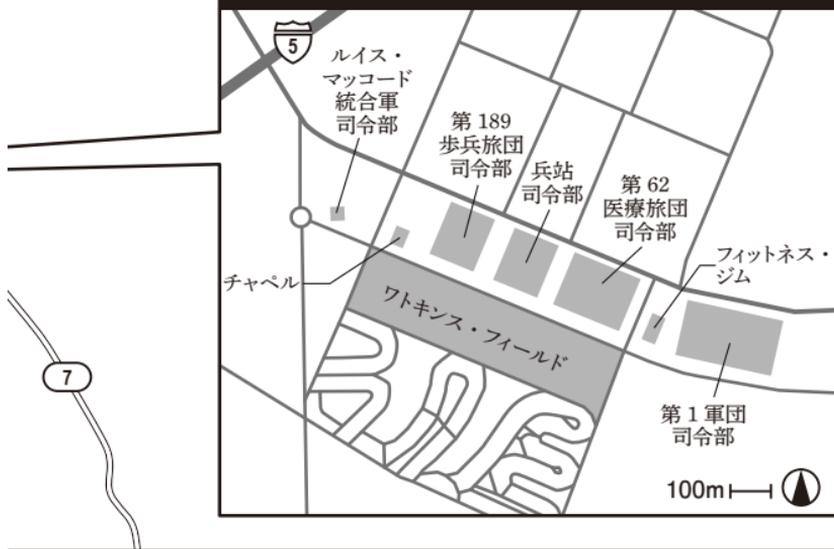
口絵・挿画  
地図 平面惑星  
安田忠幸

## 目次

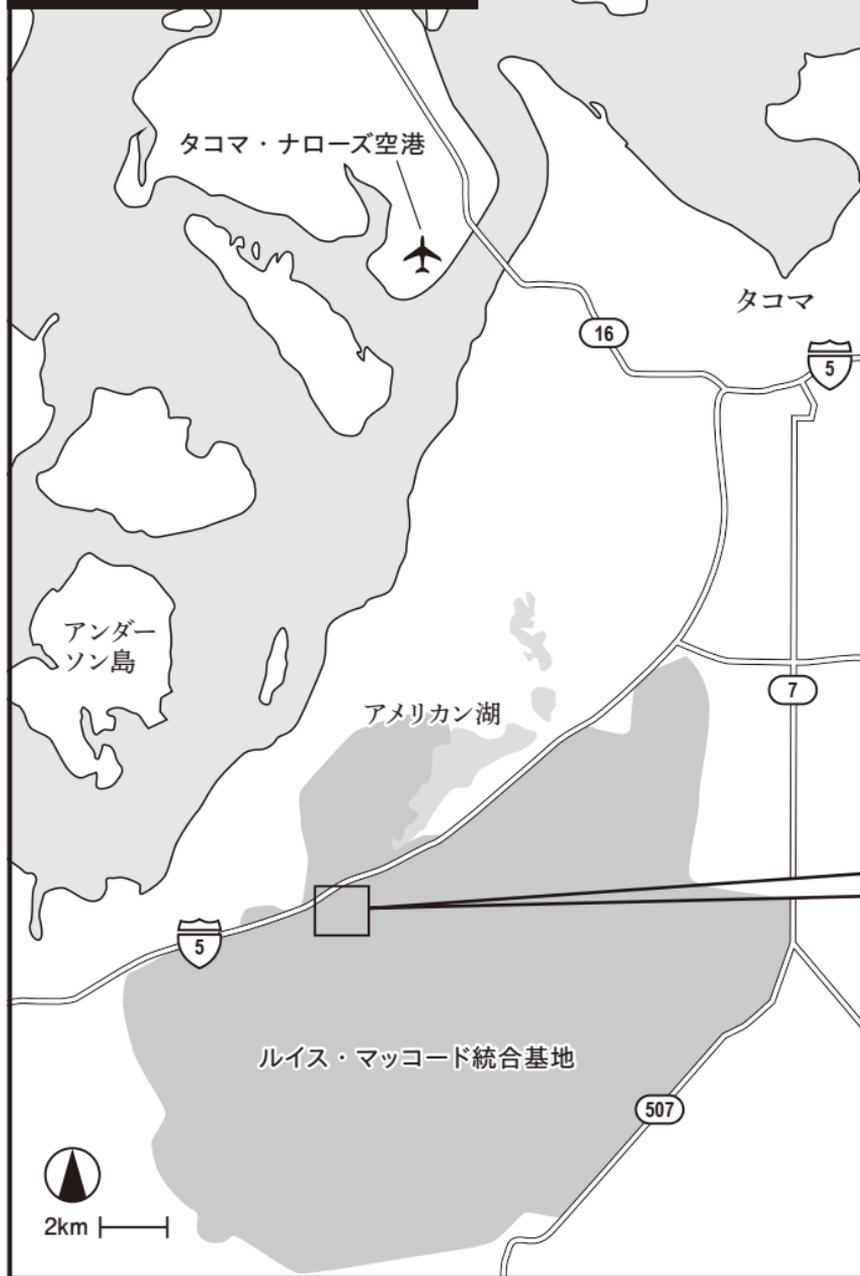
プロローグ	13
第一章 フットサル	18
第二章 ドローン攻撃	41
第三章 因縁	70
第四章 つかの間の平和	98
第五章 灼熱地獄	123
第六章 ナイト・ストーカーズ	147
第七章 盗まれた眼	174
第八章 湖畔の戦い——合衆国軍決起	195
エピローグ	215



### ルイス・マッコード統合基地司令部周辺



# シアトル タコマ周辺



# 登場人物紹介

## //// [日本] ////

### ●陸上自衛隊

#### 《特殊部隊サイレント・コア》

どもんこうへい  
土門康平 陸将補。北米派遣統合司令官。コードネーム：デナリ。

#### 〈原田小隊〉

はらだたくみ  
原田拓海 三佐。海自生徒隊卒、空自救難隊出身。コードネーム：ハンター。

まちだはるお  
待田晴郎 一曹。地図読みのプロ。コードネーム：ガル。

#### 〈姜小隊〉

かんあやか  
姜彩夏 二佐。元韓国陸軍参謀本部作戦二課所属。コードネーム：ブラックバーン。

うるしばらたけとみ  
漆原武富 曹長。小隊ナンバー2。コードネーム：バレル。

ふくとめだん  
福留弾 一曹。分隊長。コードネーム：チェスト。

い い かける  
井伊翔 一曹。姜小隊のITエンジニア。コードネーム：リベット。

みずの ともお  
水野智雄 一曹。分隊長コードネーム：フィッシュ。

#### 《水陸機動団》

しばひかる  
司馬光 一佐。アダック島派遣部隊司令官。水機団格闘技教官。

#### 〈第3水陸機動連隊〉

ごとうまさのり  
後藤正典 一佐。連隊長。

ごん だ よう じ  
権田洋二 二佐。副隊長。

さめじまたくろう  
鮫島拓郎 二佐。隊長。

さかさしの すけ  
榊真之介 一尉。第2小隊長。

く どうしん ぞう  
工藤真造 曹長。小隊ナンバー2。

い わらしん の すけ  
居村真之輔 陸将。防衛装備庁・長官官房装備官。

### ●在シアトル日本総領事館

どもんえりこ  
土門恵理子 二等書記官。

## ●ロスアンゼルス総領事館

ふじわらかねと  
藤原兼人 一等書記官。

## ////【アメリカ】////

### ●エネルギー省

M・A（ミライ・アヤセ） 通称・ソーサラー魔術師“ヴァイオレット”。Qクリ  
アランスの持ち主。

レベッカ・カーソン 海軍少佐。M・Aの秘書。

サイモン・ディアス 博士。エネルギー省技術主任。

### ●N S A国家安全保障局

エドガー・アリムラ 陸軍大将。NSA長官。

### ●陸軍

〈第160特殊作戦航空連隊〉“ナイト・ストーカーズ”

ディクソン・ソプラノ 陸軍大佐。第4大隊長。

メイソン・バーデン 中佐。シェミア分遣隊隊長。

ゲーリー・アトキンス 中佐。第4大隊デルタ中隊。

ベラ・ウエスト 中尉。副操縦士。

〈第189歩兵旅団第358連隊〉

サム・クルソー 陸軍大佐。連隊長。

・第2大隊（機甲）

ソフィア・R・オキーフ 陸軍少佐。作戦参謀。

・ミルバーン隊

アイザック・ミルバーン 元陸軍中佐。警備会社の顧問。かつてデル  
タ・フォースの一個中隊を率いていた。

“ムース” 狙撃手。

“タイガー” 分隊支援火器&ドローン担当。

### ●海軍

・ネイビー・シールズ・チーム7

イーライ・ハント 海軍中尉。

マシュー・ライス 上等兵曹（軍曹）。狙撃手。

## ●空軍

テリー・バスケス 空軍中佐。終末の日の指揮機“イカロス”指揮官。  
スペンサー・キム 中佐。NSAきってのスーパー・ハッカー。

## ●ルイス・マッコード統合基地

ミッチ・ロバートソン 最上級先任曹長（SMA）。  
ノーマ・ブラウニング 中将。軍団長。

## ●ワシントン州陸軍州兵

カルロス・コスポーザ 陸軍予備役少佐。

## ●FBI

ニック・ジャレット 捜査官。行動分析課のベテラン・プロファイラー。

ルーシー・チャン 捜査官。行動分析課の新米プロファイラー。

ロン・ノックス 捜査官。サルベージ班。

## ●郡警察（テキサス州ノーラン郡）

ヘンリー・アライ 巡査部長。陸軍に二期在籍したマークスマン。

トシロー・アライ 元警部。ヘンリーの父親。

オリバー・ハッカネン 検死医。

## ●ロス市警

カミーラ・オリバレス 巡査長。

## ●ヴィレッジ

タッカー・トリーノ ドローン・クラブ“チェイサー”の部長。

ベッキー・スワンソン タッカーの幼なじみで、“チェイサー”のメンバー。

## ●“ナインティ・ナイン” = “セル”

フレッド・マイヤーズ 教授。通称“ミスター・バトラー”。

トーマス・マッケンジー 陸軍大佐。通称“<sup>グランドイーター</sup>剣闘士”トム。

アラン・ソ نداイク 少佐。

レニー・ギルバート 曹長。

ジュリエット・モーガン 動画配信ストリーマー。通称“スキニー・  
スポッター”。

### ●アメリカ空軍士官学校

しまがやりか  
島谷利香 アメリカ空軍士官学校4年生。防大から留学。

ミハイル・ニジンスキー 少尉。ウクライナ国防大学校からの留学生。

### ●その他

にしやまじょういち  
西山 穰一 ジョーイ・西山。スウィートウォーターでスシ・レスト  
ランを経営。

ソユン・キム 穰一の妻。

たしろてつや  
田代哲也 西山の会社員時代の後輩。

## ////【イギリス】////

### ●空軍

《第1戦闘グループ第2飛行隊“シャイニー・ツ”》

ピーター・フォレスト 空軍中佐。隊長。

## ////【ロシア】////

### ●民間軍事会社“ヴォストーク”

ゲンナジー・キリレンコ 陸軍大尉。



アメリカ陥落8

暗黒の夏



## プロローグ

イギリス空軍第1戦闘グループ第2飛行隊、シヤイニー・ツー、輝く第2飛行隊のニックネームを持つ部隊は、北海に面したスコットランド地方のロジーマス空軍基地に拠点を置く。

北海に面したこの基地は、敷地を一步出ると、<sup>のどか</sup>長閑な田園地帯に囲まれる。人口は僅かに七千人。それでも軍事基地があるせいで、この辺りではまだ大きな町と言える。

イギリス本土のメジャー基地としては、最果ての基地と言ってもよい。だがここは、新冷戦の最前線であり、ロシアがウクライナへ侵攻した今となっては、北海監視の重要拠点として再整備も進

んでいた。

最近、部隊は遠く極東の同志国への遠征を行ったばかりだ。そして、基地には関係無いが、ほんの七〇キロ西に、ネス湖という観光地がある。

いずれにしても、ここは辺境基地だ。

ユーロ・ファイター、タイフーン、戦闘機を駆り、その第2飛行隊を率いるピーター・フォレスト空軍中佐は、アメリカ北東部の州、メイン州上空を飛びながら、眼下を見下ろしていた。

延々と緑が続く。暗視装置で見下ろしているので、緑色には見えないが、どことなくスコットランド地方を飛んでいるような気分になった。周囲

は暗闇だが、さして危険はないので、レーダーの火は入っている。

メイン州のバンゴ空軍基地を離陸する寸前、合衆国大統領がこの混乱の責任を取って辞任するというニュースが飛び込んできた。州空軍の基地であることも、少し緊張していた。

イギリス空軍は、大混乱に陥ったアメリカを支援する目的で、空軍戦力の多くを、今この東海岸に展開していた。

フォレスト中佐の部隊も、そういう目的のもとに派遣されていた。大陸の西岸では、ロシアや中国軍が、自衛隊や韓国軍部隊とそれなりの交戦状況に陥っている様子だったが、ロシア軍は、イギリスを抜いてここまで達するような能力は持っていない。長距離偵察機の類いを飛ばす程度だ。

さして仕事はなかった。せいぜい、要人輸送機の護衛任務くらいだ。西海岸では、ミサイルや誘

導爆弾が飛び交っているという話だったが、こちらには平和そのものだ。

ただし、今日は、エネルギー省の専用機が謎の攻撃を受けたということで、少し緊張していた。護衛も、従来の二機編隊から四機編隊に増やしていた。

ことの重要性を考えると、ステルス戦闘機や早期警戒機を護衛に付けても不思議は無かったが、密かにやりたいのだろう。

暗視装置にひときわ大きくというか、白く輝いているのは、双発旅客機のエンジンだ。

イギリスでは滅多に見ないボーイング757型旅客機だった。昼間ならその白く塗られた優美な機体を拝むことが出来るだろう。副大統領専用機として運用されている。

かつて、大統領専用機の機内で宣誓した大統領が一人だけいたことを、フォレストは歴史の授業

で習った記憶があつた。ジョンソン副大統領だ。

ダラスの飛行場で、ケネディの死亡が確認されたその日、ジョンソンは機内であたふたと宣誓の儀を済ませ、機体はその瞬間から、エア・フォース・ワングのコール・サインが与えられて、首都ワシントンへと戻つた。

今頃、機内では、副大統領の宣誓式が行われているはずだった。代々、家に伝わるボロボロの聖書に手を置いて宣誓する。誰か、連邦判事の一人でも乗っていることだろうか……。

その宣誓式が終わつたら、このエア・フォース・ツーは、エア・フォース・ワンへとコールサインが変わるはずだ。それで、宣誓式が終わつたこと、世界最強の国に、新大統領が誕生したことが解る。それを見守る空に、米空軍の戦闘機が一機も飛んでいないのは皮肉だった。全米中の米軍基地で、共和党対民主党の対立が発生していた。

一部の陸軍部隊は、軍の指揮下を離脱して行動しているという話だった。彼らがいたバンゴ空軍基地は、州空軍が使う後方支援基地だが、そこですら、決起を呼びかける檄文が出回っていた。

イギリス政府は、現政権、つまり民主党政権を支持し、支援するという立場を明確にしていたが、旗色が共和党へと靡よびいたら、決断を迫られることだろう。共和党が担ぐ誰かを、合衆国の正統な大統領として認めるしかなくなるのだ。

突然、アラームが鳴り響き、正面のワイドディスプレイに、レーダー警報が出た。友軍のレーダー。それも、AMRAM空対空ミサイルのものだ。エネルギー省専用機が、友軍機による攻撃を受けたということで、友軍の周波数にも網を掛けていた。

そのAMRAMは突然現れた。ほとんど回避する時間は無かった。いったいどうやって照準を

付けてきたのかもわからない。そもそも発射母機はどこだ？ 自分の機体はエア・フォース・ツールのやや後方だが、前方に一機、遙か後方に二機のタイフーン戦闘機がいた。

これらの護衛を躲<sup>かわ</sup>して副大統領専用機に接近するのは不可能だ。いったいどうやって……。

為す術は無かった。電子妨害を掛けるには遅すぎる。AMRAMは、かなり上空から突っ込んでくる。

エア・フォース・ツーがチャフ・フレアを発射して回避行動に移るのが見えたが、機体があまりにも大き過ぎる。

ミサイルは、一発が左主翼の付け根付近に命中して爆発した。もう一発は、右水平尾翼に。主翼も尾翼も煙を噴いただけでしばらく持ったが、操縦系統が殺られたらしく、徐々に左旋回へと入った。

それでもしばらくは飛び続けたが、ゆっくりと錐<sup>まき</sup>揉み姿勢に入った。フラット・スピンで墜ちていく。フォレスト中佐は、機体を横倒しにしてそれを追いつけたが、高度をほんの五〇〇〇フィート落とした所で、ボーイング機は空中分解した。機体から噴出した油に火が点<sup>つ</sup>き、一瞬だけ光球が出現したが、誰かがそこから脱出したように見えなかった。

エア・フォース・ワンのコールサインの宣言は無かった。では、いったい今、誰が合衆国大統領なのだろう？ とフォレスト中佐は不思議に思った。

そして、われわれが知らない未知の戦闘機が飛んでいるという事実を重く受け止めるしかなかった。それは有人なのか、無人機なのかすらわからないのだ。

フォレスト中佐は、あの機体には何人乗っている

たのだろうかと思つた。恐らく最低でも三〇から四〇名の軍、政府関係者が乗つていたはずだ。中佐は、犠牲者の冥福を祈りながら、編隊に帰投を命じた。

アメリカは、暗黒の夜を迎えていた。大統領選の結果を巡る各州大陪審の結果に端を発した全国の大暴動は、あつという間に国を引き裂いた。テキサス州を除き全土が停電していたが、暴動十日目に入り、遂にテキサスの電氣も落ちた。

太平洋では、アラスカ奪還を叫ぶロシアが、アリューシャン列島のアダック島に空挺部隊を降下させ、それに中国も付き合つて犠牲者の山を築いていたが、一つずつハードルを突破し、最後には戦闘機から誘導爆弾を投じた自衛隊によって、辛うじてその野望は阻止されていた。

だが、出動を禁じられた軍内部の対立も頂点に

達し、一部の部隊は、基地を出て自らが味方する勢力への加勢に転じていた。

民主党大統領は、この十日間というものの、催涙ガスに覆われたワシントンDCのホワイトハウス、地下軍事司令部に留まっていたが、ついに、辞任を発表していた。

残念ながら、後任の決定にはまだまだ紆余曲折がありそうだった。

## 第一章 フットサル

エネルギー省で七人しかいないQクリアランスを持つエネルギー省高官、M・Aことミライ・アヤセを乗せたエネルギー省専用機、ドゥームステイ・プレインの指揮機「イカロス」は、テキサス州を目指して飛んでいた。

護衛戦闘機として、アメリカ空軍のステルス戦闘機、F・35A型戦闘機四機がびたりと付いている。慎重に、時間を掛けて選抜されたパイロットが乗っていた。そして、時々空中給油機とランデブーする。

彼女が乗るそのボーイング767型旅客機は、いかなる電波も発せず、米軍のいかなるネットワーク

上にも存在しなかったが、それでも狙われた。敵はミサイルを撃ってきた。

幸い、装備したレーザー兵器で叩き墜したが、危うい所だった。

キャビン前方に特別に設置された静音ルームでは、車椅子に乗るM・Aが、エネルギー省技術主任のサイモン・ディアス博士の説明を聞いていた。「テキサスって、自然エネルギーも盛んな所よね？」

「そうだ。石油で儲けたお金を再生エネルギーに投資している。太陽光や風力に。あそこは土地が広いから、風力が盛んだよね。とはいえ、さすが

にダラスの電力を賄うだけの発電量はない。ただ、周辺の小さな町は、いざ基幹電力が喪失しても、それで発電できるはずだった」

「それで、テキサス全土が停電しているわけね？」とM・Aは聞いた。

「きっかけは、原発の停止、制御棒が下りたこと。その理由はまだ不明。ただ、知っての通り、原発というのは余熱も莫大だ。火力発電と違って、制御棒が下りるイコール、停電ではない。タービンは、しばらくは余熱で回り続ける。何日もね。ただ今回は、そもそも避難民が殺到して酷暑の電力需要が綱渡りだった所に、制御棒が下りたことで、一気に安定性を失い、輻輳現象かくそうが発生して、停電へと至った。それを数時間経た今も復旧できていないというわけだね」

博士は、モニターに状況を出しながら解説した。「なぜ？ テキサス州全体での発電能力は、今も

供給が需要を上回っているわけよね？」

「そう思う。とりわけ風力発電は、夜も関係無く発電するからね。それなりの技術家集団もダラスにはいて、技術的なサポートが必要だとは思えなかった。しばらくは……。問題は、何箇所か輻輳の原因になっている場所で、何というか、フライホイールを上手く回せないんだ。そこをいくつか蹴飛ばしてやる必要がある」

「車を後ろから押してエンジンを掛けさせるの？」

「それに近い。そこには、エンジニアを派遣する必要があるが、われわれが向かうのが一番手っ取り早いということだ。テキサスの電気だけは何とか守らないと」

「同感よ。アビリーン近郊のダイエス空軍基地に降りれば、われわれは燃料補給もできるし、貴方は、あちこちに要員を派遣できるわけでしょ

う？」

「そう。ダラスから駆けつける電力会社のエンジニア連中と協議もできる。ダイエスが一番無難だろうね。アビリーンのすぐ西に、スウィートウォーターという小さな町があるが、ここなんて風力発電で電気が来てなきやおかしいんだ。なのに点いたり消えたりを繰り返している。今夜はともかくとして、明日日中までにダラスで電気が復旧しないととなると、熱中症で大勢の老人や子どもが死ぬことになるだろう。たぶん万の単位でね。もちろん暴動も起こる。燻<sup>くすぶ</sup>っている所に、誰かがガソリンをぶちまけて」

「貴方はベストを尽くして下さい。私は、この機体を安全に運用するために全力を尽くします」

M・Aは、この機上ですで一週間以上を過ごしていた。たぶん、大混乱が始まって以来だから、十日くらい経つかも知れない。時々、地上に降り

るにせよ、車椅子が必要な彼女は、機体から出ることはまず無かった。

そして、多忙だった。技術主任が出て行くと、副官のレベッカ・カーソン海軍少佐と、この機体を指揮する空軍のテリー・バスケス中佐が現れた。バスケス中佐は、右手に見慣れないブリーフケースを持っていた。無地で黒い感じのブリーフケースだったが、M・Aは一度も見たことはなかった。

「まず、エア・フォース・ツー撃墜のニュースです。敵は、餌に食いつきました。リンク16にデータを載せた途端に現れた。ほんの二時間後です。われわれを攻撃した敵とは別の何者かと考えて良い。それが東海岸にも潜んでいる」

「あの旅客機は、まちがいなく無人だったのね？」

「はい。あれは退役予定で、軍が中型機を無人機



運用するためのテストベッドとして改造した機体でした。全ては地上基地からのリモート操縦です。パイロット一人乗っていませんでしたが、副大統領が乗っていて、そこで大統領宣誓式を行うという偽情報は、それなりにばらまきました。敵はそれに食いついた。護衛に付いていた、英国空軍も知りません。彼らはあの機体の中で、大統領就任宣誓式が行われたと思っただけです」

「で、今、わが国の大統領は誰で、誰が核のボタンを握っているのかしら？」

「大統領が誰かは存じません。副大統領がどこかの秘密軍事基地で宣誓していることを祈りたいですが。しかし、核のボタンならここにありません」

バスケス中佐はM・Aの目の前に、そのブリーフケースを置いて開いた。似たようなものを、M・Aは写真で見たことがあった。

M・Aは、思わず「止よしてよ……」と呻うめいた。

「われわれはこれを、フットボールフットボールに対するフットサルフットサルと呼んでいます。機能は、大統領核発射装置核発射装置とほぼ同じです。貴方の声紋、虹彩、指紋情報を登録してスタンバイ状態にする必要がありますが」

「どういうことよ？ なぜこんなものがここにあるのよ？」

M・Aは、さして驚きの無い表情で聞いた。

「話せば長いのですが、二〇二一年の議事堂襲撃事件の後、軍は、その資質を欠く人物によるホワイトハウスの支配という事態を憂慮し始めました。そこで、ギロチン条項を軍内部に規定した。軍の高官やエネルギー省の高官ら、つまり魔術師ソーマサライのコードネームを持つ、七名のエネルギー省高官ですが、彼らが、大統領を不適格だと判断したら、その発射キーを取り上げることが出来るという規定

を設けた。ただし、誰かが発射キーを持つ必要はある。軍の高官は、あまりにホワイトハウスに近いと言うことで、その役割は、エネルギー省のソーサラーに委ねられた。ソーサラー・ブルーが乗ったDC・9が中国軍によって撃墜されたのは、そのためです。トップ・シークレットを中国は知っていたでしょう。国家安全保障上、その機能を有する無線装置の近くにいるソーサラーは、今や貴方一人となった。貴方が、こんな豪華な飛行機に乗っているのも、実は、核のボタンを持っているからです。全米の電気を復旧させるためではない」

「それ、合衆国憲法のどこかの修正条項に書いてあるのかしら？」

「いえ。この作戦は、ポトマック・ルールと呼ばれています。知っている者は、合衆国の現役軍人でも二〇人とはいいはらずです。自分もや

っとその重荷から解放されます」

「私ひとりの判断で、そのボタンを押せるの？」

「はい。建前上は、ソーサラー二名によって押すことになっていますが、そういう状況は望めないで、一人でも押せます」

「たとえば、何者かが私の額に銃口を押し当てて、押せ！ と強要しても可能なのね？」

「可能です。本機に搭乗している海兵隊員には、貴方を守るよう命じてありますが、貴方がどんな権限を持っているかは知りません。今後とも報せない方が良いでしょう」

「私やレベッカが、自分たちの子どもが死んだことを知って、復讐心に燃えてボタンを押すとしたら？」

「そうならないことを祈ります」

「では今現在、どこかにいるだろう、辞職は表明したけれど、まだ職に留まっている大統領は、こ

のボタンを押せるの？ 押せないの？」

「向こうのシステムがオンラインになった時点で、こちらにアラームが点<sup>とも</sup>ります。それを許可するかどうかの権限は貴方が持っています。厳密に言うならば、大統領はもう、それを『押せない』と言うべきでしょうね」

M・Aは、モニターの小さなカメラに向かって顔認証、光彩、指紋、声を登録した。

「これ、本物と比較すると随分小型よね？ 本物は四〇ポンドはあるのでしょうか？」

「はい。システムの再設計と、バッテリーの高性能化によって小型化を達成したのと、あちらは、専用の軍事衛星を使いますが、これは、いざとなれば、低軌道なスターリンクも使えます。軍事衛星をピンポイントで破壊することは可能ですが、何千基と上がっているあの手の衛星コンステレーションを全て破壊や妨害するのは不可能なので」

バスケス中佐は、そのブリーフケースをスタンバイ・モードにすると、M・Aの車椅子の背後のポケットに仕舞った。

「トイレの中まで付いてこないでよね」

「もちろんです。それはカーソン少佐にお願いします」

「ひとまずこの件はお終い。それで……、大統領は誰なのよ？ 副大統領が無事で、どこかに隠れていて宣誓したとしたら、まず全軍に告知されるわよね？ 国民が知る前に——」

「『ポトマック・ルール』で想定されたいくつかのシナリオに従うなら、副大統領は、大統領就任を固辞したとみるのが妥当でしょうね。それを隠す理由がないから。情報がないということは、彼女が固辞しているということですよ」

「彼女、癌のニュースがあったわよね？」

「治療可能な腫瘍だと聞いています。ただ、断る

理由には出来るでしょう。次は下院議長ですが、彼は移民だからその資格を持たない。いずれにせよ、上院も下院も共和党議長だから、すんなり上院議長に出来るでしょうが。ただ、今の上院議長は、ホワイトハウスに宥和的過ぎると、共和党でも評判が悪い」

「大統領選挙で採めた裁判相手の相手候補が、晴れて大統領に当選するわけではないのよね？」

「ネットで読んだ程度ですが、それはまず連邦最高裁で、共和党候補の勝利宣言が為されなければならぬとする意見が大勢で、最低でも半年程度の時間は必要です。民主党が選挙で負けたわけではないという体裁を取るためにも、それは無いのでは……」

「いつそそうなれば、この騒乱、共和党の圧勝と言ふことで収まるのではないの？ 民主党支持者はひとまず矛盾を収めて家路に就く」

「それだって、誰かの陰謀だ！ ということにされますよ。事実として国民に浸透させるには、電氣と通信インフラの復旧は不可欠です」

「ただこれ、仮に現副大統領にその気が無かったとしても、副大統領専用機と共に空に散ったはずの副大統領が、実は生きていたとなると、あとあと採め事の種になるわよね。彼女が意見をひっくり返して、自分が正式な大統領であつて、辞退した覚えはない！ とでも言い出したら……」

「民主党の希望になるかも知れませんが、しかし、シラプラスの悪魔<sup>おとり</sup>が実在するとしたら、副大統領機を囮にするだけのことはあつたでしょう。あとは、ミダスがやるだけのことをやってくれれば。あるいはタイガー・キムが」

「この二四時間、私たちは前進したのかしら？」  
「アリユーシヤン列島のアダック島を守り切りました。今は韓国軍正規軍部隊も到着し、あそこを

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。